

# 日尾邦子『江島鎌倉紀行』考

時 田 紗 緒 里

## はじめに

日尾邦子（文化十二年（一八一五）～明治十八年（一八八五））は、花月園と号し歌人としてその名が知られる。文政十一年（一八二八）に出羽庄内藩主酒井家の侍女となり、出羽国鶴岡藩の江戸藩邸に仕えている折、日尾荆山（寛政元年（一七八九）～安政六年（一八五九））に和歌と書を習った。荆山は漢学を亀田鵬斎に学んだ儒者でありながら、清水浜臣に師事して国学にも通じていた人物である。後に邦子は荆山の後妻となり、荆山の死後に先妻の子直子と竹陰女塾を開いている。

邦子は『貞婦染行状』（安永四年刊）、『花月園謾筆』、『江島鎌倉紀行』といった和文を著しているが、前述の通り歌人または教育者としての面に注目され、その和文については研究されてこなかった<sup>1)</sup>。本論文は、邦子自筆の日本女子大学本『江島鎌倉紀行』を取り上げ今まで知られていなかった本書についての概要を示すことを目的とする。また、邦子の学問的教養についても明らかにしたい。

## 一 『江島鎌倉紀行』について

まず、『江島鎌倉紀行』（日本女子大学本、請求記号 Wa291.37 H10）の書誌を記す。

外題『江島鎌倉紀行』（中央題簽）、写本、大本一冊、縦二十七cm×横十九cm、三十七丁、一面八行。（本稿末に表紙写真有。）

末尾に「嘉永といふとしのふたとせとりの卯月 日尾くに子<sup>2)</sup>」との記載がある。すなわち、本書は嘉永二年（一八四九）、己酉の年の四月に成立したと判じられよう。

邦子が夫荆山と共に、自宅の湯島から鎌倉、江の島とを巡る旅を記した紀行文で、冒頭に記される旅立ちの契機は、次の通りである。とき、こる鎌倉山に古き路を尋ね、玉藻よる江の寫にめづらかなる貝ひろはむと思ひ立給へるも、そ、のかされしもきのふ今日にはあらざりつるを、何くれと打過し給へるが、いとほしうて、ことし社などすらめ。参らするをりしも、戸塚なるをしへ子近藤英斉ぬしがもとより、この月はいかでおぼしたてとせうそこし給へるがうれしとて、卯月十三日頓て出立むとの給ふに、さはとて旅のてうどいささかとりもたせ、子供らにいとまごひ

してゆしまをたちいづ。

鎌倉山の旧跡を訪ね、また江の島の名物である貝を拾いたいという思いを長年抱いていた邦子は、戸塚にいる荊山の教え子・近藤英斉の招きにより、荊山と共に四月十三日、湯島を発つ。

旅の動機として挙げられる「貝拾い」については、『新編鎌倉志』<sup>(3)</sup>（以後、『江島鎌倉紀行』の表記に則って『鎌倉志』）巻之六「七里濱」の項に、「又花貝とて美しき貝あり。兒女拾て作り花にする也。桜貝とも云ふ。桜色なる故なり。」とある。こうした記述から、実物を目にしたいと思うようになったのであらう。

近藤英斉なる人物については特定するに至らなかったが、戸塚に住む荊山の教え子<sup>(4)</sup>であり、生まれは鎌倉の大蔵であることが本書に記されている。（「戸塚なる教え子」、「英斉ぬしは此大くらに生立し人なれば、此わたりのいことはいとよく知れるが」）

英斉は、十六日に合流した後、旅に同行している。そして、本書は戸塚に戻った後英斉と別れる場面までを描く。本書冒頭部、「この月はいかでおぼしたて」と英斉から鎌倉・江の島への旅を打診する手紙が来たことが旅のきっかけとなっているのであるが、「そ、のかされしもきのふ今日にはあらざりつるを」とあり、この手紙よりも以前に旅の話題が挙がっていたらしい。

旅の終わり、戸塚での別れの折に英斉は、

ふる郷を教のおやにしろべしてわがめもけふぞあらたまりぬるとの和歌を詠んでおり、荊山と邦子の悲願である鎌倉・江の島の名所巡りの願いを実現させると共に、自らの故郷を紹介する意思のもと案内役をかってでたものだろう。

なお、荊山は英斉の和歌を受けて

をしえ子にをしへられ簡たきゝこるかまくら山をけふみつるかも

と返している。自らの教え子に教えられる日がくるとは、という荊山の感慨が見え、旅の実現に至る英斉の役割は大きかったと思われる。

この旅の日程は四月十三日に湯島を出立し、鎌倉と江の島を巡った後、二十一日、戸塚に帰るまでで、九日間である。

旅程を以下、簡単にまとめた。

## 【表二】旅程

十三日 湯島→品川→神奈川、「小寫何がし」宅宿泊

十四日 雨、「小寫何がし」宅宿泊

十五日 雨、「小寫何がし」宅宿泊

十六日 神奈河→保土が谷→戸塚、「近藤英斉」宅宿泊

十七日 戸塚、松蔭庵（鈴木何がし）所有か 宿泊

十八日 戸塚、「近藤英斉」宅再度宿泊

十九日 戸塚→原宿→藤沢→江の島、「宇多河」宅宿泊

○龍口寺、児が淵、弁財天、大日如来（胎内くぐり）

二十日 江の島→腰越→七里が濱→長谷→鎌倉、「金子織部」

宅泊

※英斉の知人「みつはし」宅で休憩、酒宴

○満福寺、極楽寺、月影の谷（阿仏尼のやしき跡）、星月夜の井、水瀬川、長谷寺、清浄光寺、藤九郎盛長の屋敷跡、尊氏屋敷の跡、鶴ヶ丘（神宮）、頼朝やしき、大塔の宮のとらはれ玉ひし土牢、紅葉が谷（瑞泉寺）、覚園寺、大楽

寺

二十一日 鎌倉・江の嶋・戸塚

○源氏山、浄光寺（矢ひろひぢぞう）、海蔵寺

※地名 旧跡・名所は全て『江島鎌倉紀行』の表記のままとし

た

※取り上げた旧跡・名所のうち、通過したのみの場所は省略した

旅の宿は、まず十三日・十五日は神奈川の「小寫何がし」の家である。「英斉ぬしがゆかり」の者で、「まれ人きませり」と大喜びして歓待したという。十六日には旅のきつかけともなった、近藤英斉の家に宿泊。翌日十七日は、「鈴木何がし」の家の後ろの岡に建つ「松蔭庵」なる庵にて歓待を受けている。「鈴木何がし」については特に記載がないが、十八日に特に移動の経緯が書かれずに再度英斉の宅に宿泊していることから、英斉の家と「鈴木何がし」の家とはごく近所にあると推測される。

十九日は「宇田川」、二十日は「金子織部」の家に宿泊している。両者には「何がし」がついていない。これは英斉にもなかったことから、「何がし」とされる者は英斉の紹介で対面した者で、荊山のかねてからの知人と区別をしているものか。

次に、本書執筆の動機が跋文に書かれるので、以下に引用する。

えのしま鎌倉の遊はこたびはじめてなれば、猶よく見まほしかりつれど、雨はひゞこほしにふればそこかしこに九ツのうしの毛一節許を見てふた、び遊ばむ日を待とはすれど、たゞに見すぐしたらむもほいなければ、日記めきたる筆のすさみをしたる

本書の旅は九日間だが、うち二日間雨のために神奈川の小寫宅に逗留していて、主要な目的である鎌倉・江の島は一日半ほどしか観光できていない。故に「九ツのうしの毛一節許」、すなわち多くある見所のうちのほんの一部しか見ることができず、またじつくりと見て回る時間もなかったと感じ、再訪を願っている。そして、再度の旅が実現するまでに何もしないのも物足りないために、「日記めきたる」ものを書いたのだという。

また、跋文にて邦子は、

ふる事などいとかかしげにものしたるを、女のかしこでてすと  
うとまじう見給ふらむ人もや有らむ  
と、女だてらに本書に各地の伝承や和歌・古典に多く言及することへの懸念を述べつつ、

またく鎌倉志と云さかしと大人に聞るとをにぶき筆に書のばへ  
たるのみにて、わらはるよくわきまへたるにはあらず見給ふら  
む人、さかしだてすとなおほしぞゆめ

として、『鎌倉志』に拠ったものと荊山に聞いたことを書いただけなので、決して自らの知をひけらかすようなものではないと述べる。『鎌倉志』の引用は百十九という膨大な量の資料に及び、その中には勅撰集や紀行文も含まれるため、『江島鎌倉紀行』に引用される古典・故事の典故が原典に拠るか『鎌倉志』に拠るかは判別できないものの、その影響が大きいことは疑いない。また、荊山と邦子とがともに師弟関係だったため、この旅の中でも荊山から学びを得ながらそれを書き残していることもあるだろう。

邦子が「鎌倉志と云さかしと大人に聞るとをにぶき筆に書のばへたるのみ」と述べる理由として、荊山が旅の中で『十六夜日記』阿

仏尼に関する考証を書いており、それをそのまま邦子が『江島鎌倉紀行』に掲載していることも考えられる。荆山の考証について、「〔筆者注・荆山が〕ふと思ひえたるまゝを書付て、妹が筆すさみのさまたげをなすのみと書付給へるを其まゝ、こゝにくはへ」たものだという。邦子には『鎌倉志』の検証を行う意図はないと示すための言であらうか。

以上、『江島鎌倉紀行』の概要を示した。旅の実現は英斉の果たした役割が大きいこと、『鎌倉志』の利用が大きな要素であることが確認できた。まずは邦子の述べるところの「鎌倉志と云さかし」が『江島鎌倉紀行』および邦子の旅に関わるかについてを見ておくこととしたい。

## 二 『江島鎌倉紀行』における『鎌倉志』の引用

先に述べた通り、『江島鎌倉紀行』に記される名所・旧跡については『鎌倉志』に拠るところが多い。少なくとも、「兎が淵」「弁財天」（江の島弁財天）「大日如来」（胎内くまり）「満福寺」「七里が濱」「日蓮上人けさかけ松」「極楽寺」「月影の谷」「星月夜の井」「みな瀬川」「長谷寺」「鶴ヶ丘（神宮）」「大塔の宮のとははれ玉ひし土牢」「紅葉が谷」「錦屏山瑞泉寺」「覚園寺・大楽寺」「源氏山」「浄光寺、矢ひろひぢぞう」「海蔵寺<sup>5</sup>」、以上の場所は「鎌倉志」を参照していると思われる、名前のみが記される場所や通過した場所も含めるとさらにその数は多くなるだろう。

まず、『江島鎌倉紀行』において『鎌倉志』を引用しているともしき記事を指摘し、その引用方法を例示する。

### 【表二】『鎌倉志』をほぼそのまま利用する例

#### 例一…西行のみかへり松

「江」（龍口寺）門前より南に入て、そのかたはらに西行のみかへり松と云有。西行、こゝに來りし時、此木を都のかたへねぢたりしより、枝葉みなにしをさせりといふ。

〔鎌〕西行見返松は、片瀬村へ行路辺の右にあり。枝葉西方へ指西行此所に来て西の方を見返、此松の枝を都の方へねぢたりと也。故に戻松とも云ふ。  
（西行見返松）

#### 例二…星月夜の井

「江」やがて坂の下に出、右の方に星月夜の井と有。所の人はほしのものとみいふめり。後堀川百首に常陸が歌に、我一人かまくら山をすぎ行はほし月よ杜うれしかりけれとよみ、法印行惠の北国紀行に、極楽寺へいたる程にいとくらき山間に星月夜といふ處有。むかし此道に星御堂とて伝りきなど、古き僧の申侍りしかば、歌に今も猶ほし月よこそ残るらめ寺なき谷のやみのともしひなどいへるを見れば、星月よは此谷のふるき名にして、井の名にてはあらざりけらし

〔鎌〕星月夜井は、極楽寺の切通へ上る坂の下、右の方にあり。（略）〔後堀河百首〕に、常陸が歌に、「我ひとり鎌倉山を越行ば、星月夜こそうれしかりけれ」。又法印行堯惠〔北国紀行〕に、「極楽寺へいたる程に、いとくらき山間に星月夜と云所あり。昔此道に星御堂とて侍きなど、古僧の申侍しかば、歌に、今も猶ほし月よこそ残るらめ、寺なきたにの、闇の燈」とあり。星御堂と云は、此虚空藏堂の事なりと云。今按ずるに、此谷の名を

星月夜と云。あながち井の名にはあらず。千壽話にも、明もやすらん星月夜と有。古歌にも、井は不詠。  
〔星月夜井〕

### 例三…底抜けの井（海蔵寺）

〔江〕下りて扇が谷海蔵寺を尋ぬ。惣門に入、左の方に底抜けの井有。（略）伝へ云、昔上杵家に尼有しが参禅して此井の水をくみてたちまち大にさとする事をえて賤のめいたゞく桶の底ぬけてひたみにかゝる有明の月と詠りしより名付くといへり。此事またく金澤越後守平の顯時がさな名千代野、後に尼と成て無着と云しが、佛光禪師に参じてさとりえたる時、千代野がいたゞく桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらずと詠りしことに相似たり。或はこれらのことを誤り伝へたるにやといへり。

〔鎌〕総門の外、右手の方にあり。相伝ふ、昔し上杉家の尼、参禅して、此井水を汲て投機す。歌あり。「賤の女が戴く桶の底ぬけて、ひた身にかゝる有明の月」。此因縁に依て、底脱井と云伝ふとあり。（以下、割注）按ずるに、城陸奥守平泰盛が女、金澤越後守平顯時が室となる。後に比丘尼となり、無着と号す。法名如大と云。仏光禪師に参して悟徹す。投機の和歌あり。「ちよのうがいたゞくをけのそこぬけて、水たまらねば、月もやどらず」と云云。ちよのうは無着がさな名也。此底脱井の事、無着が事をあやまりて傳へたるか。上杉の尼、何人と云事しらず。  
〔海蔵寺〕の項の「底脱井」

※〔江〕＝『江島鎌倉紀行』『鎌』＝『鎌倉志』

※例示の項目名は『江の島鎌倉紀行』での表記に基づく

※『鎌倉志』の引用元の項目名は、それぞれ末尾に「○」で示した

※以下【表三】も同

例一から三は、『鎌倉志』をほぼそのまま利用するものである。例一は、西行見返り松についての逸話を載せるが、西行が「都の方へぬちた」るが故に見返り松というのだとする表現が双方ほぼ同一である。

また例二についても、星月夜の井について「後堀河百首」と『北国紀行』を引いていること、昔を知る僧の話をもとに星月夜の井が地名（谷の名）であつて井戸名ではないとの考証を行っていることが共通しており、『江島鎌倉紀行』が『鎌倉紀行』をそのまま利用していることは明らかであろう。

例三は底抜けの井と名付けられた経緯として「上杵家の尼」の逸話を紹介した後、その逸話は平顯時の室千代野（無着）のことと混同されているのではないかと考察する。内容も、考察の過程も『江島鎌倉紀行』『鎌倉志』とは同一といつてよく、邦子が『鎌倉志』を典拠としてまとめているものだろう。

例一から三まで、内容から表現まで『鎌倉志』に基づき、ほぼそのまま引用している例を示した。続いて、『江島鎌倉紀行』において『鎌倉志』を典拠としながらも大きく省略している箇所を示す。

【表三】『鎌倉志』に詳しく『江島鎌倉紀行』で省略して記載をする例

例四…児が瀧

「江」児が測といふ有。藍なす水いと物すこし。白菊といへる児と自休といへる法師のこゝにしづみて死せし昔話、げにさりやなどいへば、うしまされきおよつけとないひそとて、

衣手のうらなる玉をつみふかきまどひの測にすてしおろかさ

とて、わらひ玉ふ。

「鎌」龍穴へ行坂の崖下、右の方の海水、碧潭如藍なる所を云ふなり。昔建長寺の広徳菴に、自休藏主と云僧あり。奥州志信の人なり。江島へ百日参詣しけるに、雪下相承院の白菊と云児是も江島へ参詣しけるに、自休藏主邂逅してけり。いかにもして、忍よるべき便を云けれども、絶て其返事だになし。猶さまゝ云聞すれば、白菊、せんかたなくて、或夜まぎれ出て、又江島へ行、扇子に歌を書て、渡守を頼み、我を尋る人あらば。見せよとてかくなん、「白菊としのぶのさとの人とは、思ひ入り江の島とこたへよ」。又、「うきことを思ひ入り江の島かげに、捨る命は波の下草」と詠て、此淵に身を投たり。自休尋来て此事を聞、かく思ひつゞける。（以下、漢詩省略）又歌に、「白菊の花のなさけの深き海に、ともに入江の島ぞ嬉しき」と詠で、其ま、海に沈となん。故に児淵と名となり。（「児淵」）

#### 例五・覚園寺・大楽寺（薬師堂梁牌）

「江」覚園寺の門を入れば、左の方に大楽寺有。（略）梁碑の銘左は、征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹、書右は文和三年十二月八日住持沙門思淳謹誌と有。銘文は鎌倉志にのせたり。

「鎌」梁牌銘 今上皇帝、聖寿無強、天下元黎、淳風有路、異

国降伏、昌懇祈之場、伽藍常住、転不窮之法輪、人々帰敬三実、国々歌楽太平、敬白、征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹書（以下割注）左の方にあり。（割注終）

征夷大將軍、冠蓋一天、武威統於万邦、榮運及於億載、梵宇固基、至慈尊之出世、法燈無尽、照偏界之思重昏、衆僧和合、諸天擁護、敬白、文和三年十二月八日、住持沙門思淳謹誌、（以下割注）右の方に有。尊氏自筆を染るの由、証文あり。此梁牌は修理の時の年号也。（「覚園寺」）

例四は、『江島鎌倉紀行』では稚児ヶ淵に関する自休と白菊の逸話を「白菊といへる児と自休といへる法師のこゝにしづみて死せし昔話」とまとめている。これは、一見して『鎌倉志』引用と特定し難いように思われるが、『江島鎌倉紀行』で稚児ヶ淵を「藍なす水」と表現するのは、『鎌倉志』「崖下、右の方の海水、碧潭如藍なる所」に基づくものと推定される。とすれば、『江島鎌倉紀行』の「げにさりや」とは、『鎌倉志』で記される自休と白菊の記事に対する言として続くものであろう。

例五は、大楽寺の薬師堂梁牌の銘文を『鎌倉志』に記してあることを示して省略していた。邦子が『鎌倉志』を引用元としていることが明らかであると共に、読者に対しても参照を前提としている。

以上、『江島鎌倉紀行』における『鎌倉志』の利用を見てきた。邦子らが巡った名所・旧跡についての由来・由緒は『鎌倉志』を根拠とし、邦子による考証は為されていないことが分かる。唯一、先に述べた阿仏尼にまつわる荊山の考証は『鎌倉志』に異を唱えるものではあるが、邦子自身は自らの論ではないと明確に立場を示す。



ただ、荊山の説をそのまま本書に掲載した事実には、本書編集者たる邦子の意が見えるとも言えようが、それらの検討は別稿に譲る。

『江島鎌倉紀行』の旅は、『鎌倉志』の記述を史実（事実）とし、それを案内として辿る旅だったと言えるだろう。

### 三 邦子の和歌

『江島鎌倉紀行』は『鎌倉志』を多く引用していることを示してきたが、『江島鎌倉紀行』は自作の和歌や漢詩で彩られて、『鎌倉志』を編集し直したものに終わらない。

本書には邦子の和歌が二十五首、荊山の和歌が十八首、英斉の和歌が五首掲載されており、また、荊山の漢詩が十一首、英斉の漢詩一首が載る。

行く先々で邦子らは和歌や漢詩を詠んでそれを記録していることから、歌枕を巡りその感慨を詠むことも、旅の目的の一つであったと思われる。本章では、邦子の和歌についての概要を示す。邦子自作の和歌全二十五首は、以下の通りである。

#### 【表四】邦子自作和歌一覧

- ① たび衣たちへる日は近けれど心にかゝる道しばの露
- ② 品河のかはべにかけてほすのりをなど海原の名に流しけむ
- ③ 海原の詠めかなしな世の中は常にもがもなであへぬまで
- ④ かもめるるしほのひがたにおもひきやいぬさへむれてあさり  
せむとは
- ⑤ 風をいたみすなごる舟のたぐひかもあやうかる世を海わたる  
身は

⑥ 何ごとをするとはなしに海つらを景るもあやなく詠めくらし  
つ

⑦ 見るがうちに風あらましく浪あれてゆくへも知らぬ蟹がとも  
ぶね

⑧ 言葉の花の林のおく深くわけてうれしきまつの下かげ

⑨ 峰ふもと日影月かげさしわけて雪も色あるふしのしば山

⑩ 引よかし松のさ枝や西へ行名におふ人のかたみ成らむ

⑪ 江の鴛やふじのねおろし吹ぬ日もうみ辺につもる波のしら雪

⑫ 花鳥をうつすかひ有嶋つとはたぐひもなみの名にぞ立ける

⑬ わだつみの深きちかひと聞からになみのしらゆふかけてこそ  
いのれ

⑭ 江のしまのなみ／＼ならぬ詠めにはたちまさるべき言葉もな  
し

⑮ いか許さがなき口のとりまもてつらなる枝の中はさきけむ

⑯ 故郷へ帰らむつとに錦貝袖のうらはにいさひろへ妹

⑰ 草枕露に契しいざよひの名もなつかしき月かげのやつ

⑱ わりなくもせきとめられし雨川のみなもといかにわびしかり  
けむ

⑲ 世中がさはいざしら浪のおもかげにみななせ河に匂ふ卯花  
らむ

⑳ みつはしのかゝるうれしきあるじをばまたいつかはと思ひ渡

㉑ 万もれた三ツのしたかふ道の外は心にかゝるやまと言葉

㉒ 三代までの花の盛はうつゝにてこてふの夢とさめし君はも

㉓ かしくもあなすさまじと思ふにぞ心もきえてふる涙かな

㉔ 鶴がをかに千代しめましし神かきの神さびぬさへかしこかり

けり

②5 ことのはのゆかり尋ねて藤が谷に昔をしのぶ袖の露けさ

※便宜上①～②5の通し番号をふって示した。

上記の和歌は、邦子単独詠(①、②、④、⑤、⑥、⑧、⑩、⑬、⑮、⑲、⑳、㉔)、邦子が荊山または英斉と和歌を詠み合うもの(㉓、㉑、㉒、㉕、㉖)、邦子が和歌を詠み荊山または英斉が漢詩を詠むもの(㉗、㉘、㉙、㉚、㉛)がある。以下、簡単にそれぞれの概要を示す。

まず、『鎌倉志』掲載範囲外である和歌①～⑧を除いて、邦子単独詠歌は『鎌倉志』掲載の名所を実際に見た光景・心情を歌う。⑩「引よかし松のさ枝や西へ行名におふ人のかたま成らむ」は、「西行のみかへり松」を詠んだもので、西にねじれた松と西行の名をかけた風景を詠む歌。⑮「いか許さがなき口のとりまもてつらなる枝の中はさきけむ」は、腰越満福寺での詠歌で、梶原景時が源頼朝に讒言し源義経を窮地に追いやったことについての憤慨を表現するものである。

邦子が荊山、英斉と和歌を詠み合うものは、「⑬故郷へ帰らむつとに錦貝袖のうらはにいさひろへ妹」に対して荊山が返歌する(「諸共にひろふかひ有海つらにつらぬる袖のうらめつらしな」)、いわば贈答歌の形式のものがある。また、「③海原の詠めかなしな世の中は常にもがもなでへあへぬまで」(荊山「かな可のうなつら遠く打さらひ行かふふねにこさめふる也」)のように、雨によって足止めされ宿で過ごしている際、余興的に目に付いた風景をテーマとして

それぞれ歌を詠むこともある。宿を借りた際に宴会の余興として和歌を詠み合うこともあり、「㉔鶴がをかに千代しめましし神かきの神さびぬさへかしこかりけり」は金子織部の求めによって座の全員が和歌を詠んだ時のものである。

邦子の詠歌状況として、最も特徴的なのは、邦子が和歌を詠むのに対して荊山または英斉が漢詩を詠むものである。邦子は漢詩の朗詠、あるいは書き付けたものを目にして、明らかにその場でその内容を理解している。その具体例を次に引用する。

やがて、かほあらひ口す、さかみなどかいつく。うしもおき出給ひぬと詠め出れば、けふは風つくよ波あらくてすなごる舟どののいとわびしげなるをみて

風をいたみすなごる舟のたぐひかもあやうかる世を海わたる身は

うしは酒たらへてひちをまくらにし給しが、めさましてよくもふる雨哉などいひつ、またとほめがね見なひて

客窓雨装寂如秋 凡坐恍然日自悠

午睡覚来無一事 遠持遠鏡看漁舟

(客窓が雨の装ひ、寂しさ秋の如く)

凡坐して恍然として、日自づから悠なり

午睡覚め来たりて、一事無し

遠く遠鏡を持ち、漁舟を見る)

(旅宿の窓は雨模様で秋のように寂しい

大体を座ってぼんやりと過ごし日はのどかに感じられる

昼寝から目覚めて一つもすることがない

見るともなしに望遠鏡を持ち、漁り船を眺める)<sup>(6)</sup>



と作て、これに合すべき哥よめとあるに、

何ごとをするとはなしに海つらを景るもあやなく詠めくら  
しつ

雨風ますますはげしうなれば、舟もみな見ず成ぬ。

見るがうちに風あらましく浪あれてゆくへも知らぬ蟹がと  
もぶね

悪天候によつて神奈川の小寫宅に滞在していた日に詠んだ歌である。荊山が漢詩を作り、それに合わせて歌を詠めと邦子に要求し、邦子が応じた。邦子の和歌⑦は「何をすることとはなく海をながめると、心がなんとなく乱れる」との意であり、荊山の漢詩の、することがなくなんとなく海を眺めるいう要素と、「客窓雨装寂寂如秋」さみしさを取って「あやな」しと歌っているものだろう。邦子は荊山の即興の漢詩を直ちに理解できるだけの漢文・漢詩読解能力を有していたことになる。

このことは邦子が『鎌倉志』に収載される漢文資料、例えば本稿引用の覺園寺薬師堂梁牌の銘も理解し得た可能性を示唆する。邦子が師について漢学を学んだという記録はないものの、身近な荊山を通して漢学・漢詩に対する造詣が深かった可能性がある。このことは、邦子の学問的教養を明らかにする一端として重要だと考える。

邦子の和歌について、例を挙げてその概要を示したが、いずれの和歌も即興である。邦子は荊山の指導のもと和歌を学んでおり、福田安典氏「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐって」において、荊山が主催する稽古歌合が多数開催されていたこと、そこに邦子も参加していたことが指摘されている。日頃の歌合での成果を、本書の和歌にも見ることができよう。

## おわりに

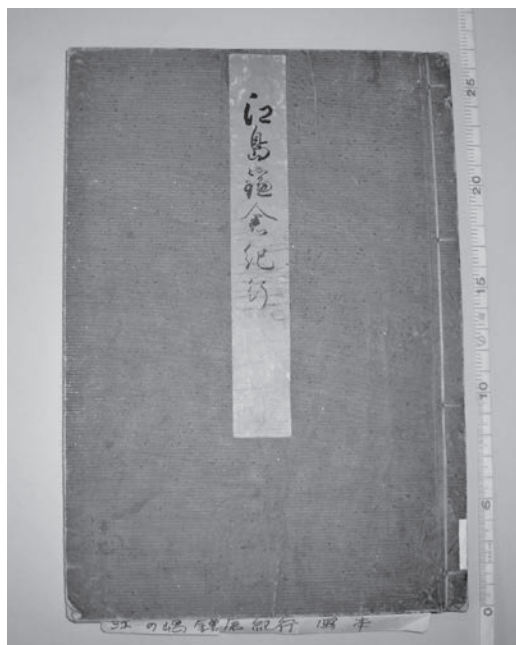
『江島鎌倉紀行』の序文・跋文を契機として、『鎌倉志』の利用と自作の和歌についての検討を行った。

『鎌倉志』の利用は、ほぼそのままを引用するか、『鎌倉志』の内容をまとめたものであり、「銘文は鎌倉志にのせたり」とする『鎌倉志』の参照を前提とした記述も見られた。邦子が冒頭で旅の動機として述べる「たきぎこる鎌倉山に古き路を尋ね、玉藻よる江の寫にめづらかなる貝ひろはむと思ひ立」つに至ったのは、『鎌倉志』に触発されたところが大きかっただろう。

邦子の自作の和歌は『鎌倉志』に記載される古の光景を実際に目にして詠んだもので、邦子の詠歌能力の高さを示すものであると共に、荊山の即興の漢詩に応じて適切な和歌を詠んでいることから、漢詩を理解する能力を有していたことも明らかにできた。

本書は写本として一冊のみ伝わる。邦子の「ふた、び遊ばむ日を待とはすれど、たゞに見すぐしたらむもほいなければ、日記めきたる筆のすさみをしたる」との言の通り、広く読まれることを想定して書かれたものではなく、旅の思い出の記録として、自らと荊山およびその周辺で享受されたものか。

なお、本稿は邦子に着目したものであるため、荊山の漢詩と和歌についてはほとんど触れなかった。『江島鎌倉紀行』の検討および荊山研究の一助としても邦子の和歌と併せて検討することを今後の課題としたい。



注(1)

先行研究として、片倉比佐子氏「日尾家女三代の作品」(『江戸期おんな考』第十五号、桂書房、二〇〇四年)などがある。邦子の義理の娘直子を中心とするものではあるが、同氏「日尾直子の至誠堂」(『台東区史通史編Ⅲ』、東京都台東区、二〇〇〇年)、「日尾直子とその周辺」(『江戸期おんな考』第十一号、桂書房、二〇〇〇年)等。また「寺子屋と女師匠 江戸から明治へ」(『一橋論叢』一一一号、一九九四年二月)において、邦子の娘直子が荊山主催の至誠塾(至誠堂)を継いでいるが、邦子の「強力なバックアップがあったと思われる」との指摘がある。

(2) 『江島鎌倉紀行』引用に際し、読みやすさのため旧字は適宜通行の字体に改め、適宜句読点、濁点を補った。

(3) 『新編鎌倉志』は貞享二年(一六八五)刊。八巻十二冊。水戸光圀の命で編纂された地誌。本文引用は日本歴史地理学会校訂『大日本地誌大系第五冊 新編鎌倉志・鎌倉攷勝考』(大日本地誌大系刊行社、一九一五年)に拠る。引用に際して旧字は通行の字体に改めた。

(4) 荊山の主催する「至誠堂」にて荊山の教えを受けた者の意であろう。

(5) 『江島鎌倉紀行』での表記そのままとし、時系列順で並べた。

(6) 原文漢文。私に書き下し文と訳を付した。

(7) 福田安典氏「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐって」(『国文目白』第五十四号、二〇一五年二月)

【付記】 本稿はJSPS科研費(課題番号21K28324)の成果の一部である。

また、本稿の執筆にあたり日本女子大学に『江島鎌倉紀行』の使用許可を頂いた。厚く御礼申し上げます。